

<書評>

有満保江著
『オーストラリアのアイデンティティー文学にみるその模索と変容』
(東京大学出版会、2003年)

加藤 めぐみ*

日本におけるオーストラリア研究が学際的に展開する中で、文学分野の貢献があまり顕著でないこと、また同時に、オーストラリア文学を体系的に紹介する研究書が少ないことが「文学畑」の研究者の間では懸案になっていた。ドイツ文学者の池内紀は、外国文学者の仕事は紹介が主体と言い切っているが、オーストラリア文学については、そのための著作が少ないのが現状である。個々の作品の翻訳や研究論文は出版されているが、体系的な研究書については、1976年版のジェフリー・ダットン編『ペンギン版オーストラリア文学史』の翻訳が1985年に出て以来主となるものが見当たらない。本国では近年1998年のベネット及びストロース編『オックスフォード版オーストラリア文学史』、2000年のエリザベス・ウェビー編『ケンブリッジ版オーストラリア文学必携』など、通史としての大きな研究書の出版が続いた。これらは、まず先住民文学より文学史を語り始めていることから伺えるように、現在の文学的状况を反映し以前の研究書とは様相を異にしている。日本でそのような現状を十分に紹介し切れていなかったなかで、初めて日本の研究者によってオーストラリア文学の全体像を捉え、現況を報告する研究書が出版されたことをまず喜ぶたい。

タイトルで明らかなように、本書はオーストラリアの自画像がいかに変容し、その変遷が文学にいかん表出したかを追ったものである。全体はゆるやかな年代順の構成を採りつつ、各章でもテーマ毎の時代の流れを追い、更にそれが掘り下げられている。中でも著者の主眼は20世紀後半にあり、本書の過半数の頁が1970年代の多文化主義政策以降の文学に充てられており、殊に1980年代以降の新しい概念の適用による文学批評が考察されている。オーストラリアの政治・社会の変化

に伴い文学が変化するさまが捉えられ、先に述べた学際的研究を進める上で、その文化・社会の理解にも役立つものと考えられる。

全七章のうち、第一章は植民地でその文学がいかに立ち上げられたかが、簡にして要を得た解説で紹介される。殊にオーストラリア文学黎明期について、神話・伝説の創造、「ブッシュ伝説」の構築とそれに対する批判が取り上げられる。ここで著者が中心に据えるのが「自然」である。旧世界とはあまりに異質な周囲の「自然」環境を、物理的・精神的にどう克服し取り込むかがオーストラリア植民者の課題であったが、文学においては、著者が述べているように、それは「英語」という言葉を用いて行う「翻訳」であった。オーストラリア文学は新しい世界の表現という「開拓」により始まったのである(p.10)。そこで自然—ブッシュを背景にした男性的・排他的な物語が19世紀から20世紀にかけての読者の共感を呼び、ブッシュの物語はナショナリズムを支える伝説となり、主流になっていく。

第二章では、この「ブッシュ伝説」創成に大きな役割を果たしたロースンの代表作の一つ「羊追いの女房」を軸に、絵画1幅と短編5つがそれに続くパロディとして考察される。種となるロースンの短編は100年間に実に作家9名、画家1名の同タイトルの作品を生むことになるが(p.37)、本書ではそれらのパロディ作品を追うことにより、「ブッシュ伝説」がその後どのように批判され、解体され、更に再構築されたかを探っている。ロースンが見る19世紀末「リアリズム」のブッシュとそこに住むオーストラリア人の関わりは、約80年後の「カウンターカルチャー」の旗手ベイルやムーアハウスの手で全く異なった角度から描かれる。更にフェミニスト作家ジェフェリスの、また同性愛者の視点で書かれたアイランドの作品が、種本であるロースンの時代の「ブッ

* 明星大学一般教育

シュ伝説」を支える男性的・排他的側面を崩壊させる。著者が述べているように、これらのパロディ作品はそれぞれの時代を反映しており、そこに見られる「ブッシュ伝説」はそれぞれの記憶の断片に過ぎなくなる。

第三章ではオーストラリア文学における「モダニズム」の代表作家としてパトリック・ホワイトに焦点が当てられる。本書唯一の作家一人に絞った章として、本章は著者のホワイトへの関心の深さを示す、読み応えあるものとなっている。ホワイトは、その難解な象徴主義や形而上的手法が強調される嫌いがあり、詩人 A.D. ホープらにより「オーストラリア性」の欠如を批判されたりもする。だがこの作家は、オーストラリア性に依拠しないある普遍性をもつ主題、すなわち 20 世紀以降の現代人が直面してきた問題—個人の存在と社会、神の否定とその再認識、人間と自然の対立と調和など—をオーストラリア文学にもたらした最初の作家であるともいえる。ホワイトはオーストラリア国内でよく読まれる人気作家とは言えず、そういった意味ではいわゆる主流派として社会全般を代弁してきたとは言い難い。だが、外れているからこそ本質が見える場合がある。コンラッドと同様にヨーロッパ社会とオーストラリアが交錯する周縁にいたホワイトが、ヨーロッパ以外の歴史の大きな流れ、「ポストコロニアリスト」としての視点を初めて提示し得た (p.94) という著者の指摘は鋭いものであろう。

先に述べたように、第四章以降最後の七章までが多文化主義政策導入以降の社会状況の中でオーストラリア文学について充てられている。まずヨーロッパの「カノン」に準拠する批評から、次第に歴史的経緯、地理的位地、移民により複合化する社会状況を重視したオーストラリアというコンテキストの中での文学批評に移り変わる流れが押さえられる。その中で現代オーストラリア文学を特徴づけるキーワードとして「ディアスポラ」—ひとつの国に居住しながらそれぞれまったく異なる時間と空間になお繋がりをもつ人びと— (p.103) が挙げられる。「ボーダー」の概念があらゆる面で希薄になりつつある現在、すべての人々にこの「ディアスポラ」の概念が多かれ少なかれ当てはまることになるであろう。第四章

では、より具体的な意味での「ディアスポラ」作家として、香港生まれでハイブリッドな背景を持つオーストラリア作家カストロと、日系イギリス作家イシグロを対比させている。彼らに共通するのは、「歴史の不連続性」であった。カストロは固定的な「歴史観」を破壊し、イシグロの場合は「伝統」や「文化」の「継続性」・「連続性」を断ち切ることによって「ディアスポラのアイデンティティ」の表現を試みているという (p.116)。そして彼らは、現在アメリカで活躍しているインド系作家ラヒリや中国系ハ・ジンら移民作家の作品にも見られるように、根本にありながら既に存在しない彼らの「ホーム」—帰属場所を探り続けるのである。

先住民アボリジニにとっては、例え父祖からの土地にいても植民地支配によってその存在が周縁化され、「ディアスポラ」化されている。第五章では、このアボリジニともう一つの少数派グループである女性がマイノリティ文学の代表として考察される。このうち特にアボリジニ文学については、次の第六章で論じられているように、その文学的「正統性」を考えたときに非常に微妙で難しい問題を孕む。マドルルーの引用にあるように、先住民文学は「先住民の文化、歴史、社会という文脈のなかに存在し、そうした文脈のなかで読まれなければならない」(p.124) とすれば、それを狭義で捉えるあまり、書き手の「正統性」を絶えず問題にしなければならない現状を招いてしまっている。ひいてはこれが「文化本質主義」の問題になっていく。この「正統性」の問題は、アボリジニ相互間でも、テキストの枠外の政治的・社会的緊張と対立をもたらし得るのである。著者は、『マイ・プレイス』を引き「オーストラリア文学はアボリジニの過去という『神話』を得、オーストラリアの大地との『融合』を果たしたといえる」と結んでいるが、このような例が大勢となるにはまだ時間がかかるかと思われる。

マイノリティ文学が持て囃され、主流派としてのアングロケルティック系作品を(ケアリーのような国際的に成功している作家を除いて) 凌駕しかねない勢いである現状は、第六章のような作家詐称事件を引き起こす。本書ではウクライナ系を装った作家がウクライナにおけるユダヤ人弾

圧を加害者側から描いたデミデンコ事件、またセルビア系の作家がアボリジニ名を使って先住民文学を装ったB. ワンガー事件を挙げ、「歴史の信憑性」、「エスニシティの正統性」と「文学的価値」の関わりについて考察する。どちらの例でも作家は白人・主流から「周縁」へ位置をずらすことにより、出版の可能性、読者層の獲得を目論んだ。これは本書で引用されているグネウの指摘のように、マイノリティ作家は、属している文化の「情報提供者」であり、「社会学的な資料」を提供していることの現われであろう (p.169)。すなわち現在のオーストラリア社会が、それを作家に期待しているのである。シューメーカーはアボリジニの作品の正統性を問うこと自体の無意味を説いているが (p.187)、作品や書き手の背景が特に高度な政治的問題を内包する場合、評価をテキストだけに依拠するのは難しい。著者が結論づけているように先住民の文化 (恐らく他のマイノリティも) が過去の正統性に回帰するのではなく、他の文化と融合し、その結果生まれてくる新しい「文化的混合」に眼を向けるべきであり、それが多文化社会の可能性ということなのである。

最終章では、マイノリティ文化の表象として、かつて文学が果たしてきた役割を現在担っていると考えられる映画が取り上げられる。かつての白人・男性中心的な典型を抑えてマイノリティの物語が増加しつつあり、内容も主流・非主流対立やアイデンティティ探しに留まらず、個人的で自由なテーマも現れていることが紹介される。

以上見てきたように、本書は「オーストラリア作家たちがオーストラリア文学の『アイデンティティ』を模索し、オーストラリア社会のダイナミックな変化に伴い劇的に遂げるその変容の過程を考察」(おわりに) したものである。通史として見たときに欲を言うのであれば、オーストラリア文学全体像の中に、いわゆるアングローケルティッ

クの主流におけるアイデンティティの構築について頁が割かれると、よりバランスが取れたかと思われる。オーストラリア主流社会が国のイメージ作りに拠り所とした像—第一次大戦のANZAC兵ディガーや、1930年代に一世を風靡したデュパンの写真「サンベーカー」等に代表されるボディ・カルチャー、ライフ・セーバーのイメージなどに連なる文学作品の行方にも興味を持たれるところである。また、マイノリティについてはカストロ以外のアジア系(カストロをアジア系と括弧することに問題があるのを承知で)の紹介は、今後の研究者の課題であろう。

本書は文学と相補するものとして絵画が多用されており、各時代の文化についての読者の理解を助けている。先に見た「羊追いの女房」の例だけでなく、第一章ではナショナリズム構築の一端を担ったハイデルベルク派の風景画が文学と相乗効果を上げ、第二章ではノーランによる「ブッシュ伝説」ヒーローの一人ネッド・ケリーの連作画が言及される。その他にも挿絵代わりの絵画が随所に登場し、文化の変遷を視覚的に辿ることができる。

本書は、限られた作家・作品ながらオーストラリア文学の全体像の変遷を論じており、冒頭で述べたように日本におけるオーストラリア文学の研究のひとつの里標となった。これを小説だけでなく詩、戯曲と広げていくことが課題であろう。オーストラリア文学紹介については、その全体像は地域研究書の一部、または事典の一項目の域を出られない状況だが、本書も『オーストラリア入門』(東京大学出版会、1996年)の一章がきっかけということである。一巻として形を成した今、本書は読者にオーストラリア文学への興味を誘い、今後の研究の発展に繋がるきっかけとなることと思われる。